(『国語学』第52巻1号　2001・3・31)

〔書　評〕

迫野虔徳著

『文献方言史研究』

安　部　清　哉

一

方言国語史（地域方言史）研究にとって大きな課題の一つは，数的にも質的にも乏しい地方語を投影した文献をいかに多く見出し，そこからどのようにして多くの情報を引き出すか，それらをどのように読み取り組み立てて，中央語とも関わる広い日本語史を構成していくか，という点にあった。本書によってその方法が提示された。本書は，あくまで文献を中心資料に置き，文献(中央)国語史と方言国語史の両分野の方法を包含した，いわば「文献方言日本語史研究」とでも言えるものである。従来の方言国語史研究の可能性が大きく広がったばかりでなく，日本語史研究の世界が拡げられた。

本書は，著者の既発表論文18本をもととし，「はじめに」を付してまとめ直されたもので，論文は1971年と1975年各1本，間を置いて1982〜97年に書かれたものである。著者には本書掲載以外に60年代からの古文書を資料とした論文も多数ある。主題はそれらとも並行しており，古くからの一環したテーマのもとに「いずれも相当の改訂を加え」393頁，整えられて一書となっている。本書は8章19節分全約400頁よりなる。内容と構成を見るのに目次が分かりやすいので，以下に章・節を示す。

はじめに
第一章　方言史と日本語史　第一節　防人歌と上代特殊仮名遣い
第二節　外国資料と方言
——新スラブ・日本語辞典とオとヲ——
第三節　「コワス」（毀）の成立（副題略）
第二章　新音韻の成立と方言的差異　第一節　促音と撥音の表記の動揺
第二節　撥音の史的推移
第三節　促音と撥音の相関——撥音の後のパ行音——
第四節　北野社目代日記の撥音表記
第三章　オ段長音の開合　第一節　オ段（合音）・ウ段長音表記の動揺
第二節　開合の混乱と地方的差異
第四章　方言特徴の成立——「中濁」考——

第五章　方言差の形成――日本語の東西方言差と「テイル」――
第六章　文献資料と方言　　第一節　方言と文献批判――交隣須知の言語――
　　第二節　文献と言語指標――『天正狂言本』の言語――
第七章　方言語彙史　　第一節　方言語彙史
　　第二節　九州方言の語彙――日葡辞書の「下」注記――
　　第三節　東国系抄物語彙覚書
　　第四節　『梅津政景日記』（副題略）
第八章　方言史資料――「日本語俗言解」考――
本書と既発表論文との関係／あとがき／索引

本書の主題は，「中央語以外の方言を反映あるいは記録した」「地方語文献」を「日本語史研究の一つの方法として活用」する研究法を提示し，それによって中央語とも関係付けた，「現象のより深い理解」による日本語史を明らかにすることにある（「はじめに」）。それゆえ，本書の各論は，基本的に，地方語文献の資料的価値の発掘また再評価，地方語（史）の考察，中央語との対照による中央国語史の見直し及び総合的解釈，という手順で多く論じられている。地方語史と中央語史の間の，言語的地域的時間的ずれや相違をも，総合的に組み込んだ「日本語史」が描かれているところに特色がある。以下各章を追って概観してみる。

二

第一章第一節は，特に「天平勝宝七年」防人歌の上代特殊仮名遣と中央語とを比較する。その違例・訛音の特徴から十か国の「筆録者のフィルター」を解き明かし，そこに東国出身者・中央出身者による相違を見出す点が最も注目される。結論では，東国方言は「音韻体系の上で畿内語とかなり異なったかたちを持っていた」とする。「規範の緩み」の結果かどうかははっきり触れていないが，音韻体系として異なるとする結論は注目される。本節は評者には最も注目されたが，この成果を応用すると方言境界線「関越線」（安部 1997）も確認できるから（後日別述），本防人歌の資料的優位性，筆録者出身地の蓋然性，音韻体系の解釈は妥当なもので，広く認められていくと思われる。東国でイ段エ段甲乙が失われながらなぜオ段だけが守られ続け得たのか，母音調和そのものにも関わるだけに，相違の根本的理由に触れていただきたかった（14 頁後 3 行目注（8）は（6）か）。

第二節では『新スラブ・日本語辞典』を検討し直し，一八世紀の薩摩方言から中央語の母音オまで再検討する。ゴンザ編とする村山七郎氏説に対して，ゴンザは被調査者でボグダーノフが記録者である「外国資料」として扱うべきこと，語頭 o 語中 wo という相補分布は，中央で過渡的とされた状況の残存とし，従来の wo 統一説の再検討へと及んで「通説にはなお疑いを残しておく余地がある」とする。『日本大文典』の再検討は特に説得力をもつ。方言資料の再評価による地域方言（史）の発見，中央語史との対照，そこか

らの定説の再検討という本書の典型的方法が示されている（59頁3行目「203ページ」は230頁，66頁2行目「注15論文」は注18）。

第三節は第二節を補強する論。コホツ→コヲツ→コボツ・コワル等「オ段＋ホ」の活用語が，語幹保持のためボ型は唇音補強・ワ型は母音転換によって長音化を回避した背景に，語中woの残存を読み解く。この唇音変化が集中する中世末近世初期ののち遠からず中央語で語中もoへと移ったとする。現象の体系的連環をたどり，中央語の直接の資料的裏付けを得にくい部分を，第二節の地方語からたどる視点が魅力的である。

説明があってもよかったと思われたのは，使い分けがi・e段に比してo段ではなぜかくも長い過渡的状況となるのか（母音の相違ではあろうがその解釈）の点。第二節と合わせると，結果としてwoに統一されずにoとなった可能性を示唆したようにも読みとれ重要であるが（wi・weの変化との統一的解釈が成り立つか）特に言及はない。ところで，コヲスのブッコス等短縮型「〜コス型」，ホトホルの短縮型ホトルとも東日本集中が示されている。この短縮化はシラビーム的地域での所謂子音性優位語形（安部1999）と見られ，「ホ→ヲ→ϕ短縮型」による地域・筆記者の音韻状況を知る手掛かりをも教えている。

第二章の4つの節は促音・撥音とその両面に亙る問題を扱う。第一節は，『天正狂言本』が，仮名ツで促音表記する一方で，「ん」表記との間で撥音・促音表記の混乱があることから，筆記者の撥音と促音は音韻的に識別しがたく東北方言のように非独立な可能性があるとする。枝葉末節の点で，語末入声音は開音節化していたとするが，開音節なら「徒」以外の表記もあり得る。『日葡』の開音節当該語例がない段階でシラビーム方言を疑う天正本が先行して開音節化したととれるかどうか。何らかの書き分けを図ったか。

第二節は，中世のバ・マ行動詞におけるウ音便とン音便を取り上げ，ウ音便は「母音とみるより撥音そのものと見ること」ができ，2種の音便は「環境によって変化する音色を二種類の異なる音の現れと理解し」たもので，やがて環境に併せて発音しやすいかたちになり区別意識を失ったとする。当該のウを「撥音」という枠組みの中で捉え直し，撥音変遷の段階的移行が示されている。西日本方言のウ音便残存との関係にも触れていただきたかった。大塚光信氏の「A語幹末がウ列音なる時　撥音/B語幹末がアイエオ列音なる時　ウ音便」という法則からは，語幹がウ列音での撥音便は語幹保持のための有標の回避形とも見得る。とすると，撥音は「ウとンの一対の形であった」が，ウ音便が基本でそれと回避形ン体制と見る段階がなかったか。ウ音便はその$\tilde{u}$やng・ηの音韻的位置が，nと母音ウとの狭間でゆれ，（柳田征司氏説のように撥音が安定することによって）体系内でウ音便の面から撥音便へと鞍替えがあったと見ると，ウ音便が西の周囲に残存しながら他の母音性特徴とは異なってやがて衰退してしまうことがわかりやすいか。

第三節は，促音・撥音の後のp音について，特殊条件での残存節と後世再生節の問題を指摘し，p・Φ・bは同次元の清濁関係でなく，①漢語の撥音の後では清音p/濁音b，②それ以外では清音Φ/濁音bの2系列をなすもので，pの再生は字音語の世界で起こった

と見る。漢語でのｐ音化の偏りを見出し，再生は，舌内入声の開音節化が遅れ「短促性がながく保たれたため」それに続くハ行子音がｐ音化し，撥音へは促音との関係ゆえ波及したとする。ところで，ｐ音再生は，まず舌内入声から「促音の完全な実現をはかるために」ｐ音化したとするが，摩擦音のサ行（「別姓」等）は「呼気の完全な停止」がなくとも促音化するので，［-FF-］での実現段階やFFとppとのゆれが全くあり得なかったとも思われない（著者もFFが「不穏当とも思われない」とする）。『日葡』に-FF-のようなpとF（Φ）とのゆれは見られないが，pのみへと引っ張る力としてｐ入声による促音及びm撥音でのｐ残存の力が働いたことも疑えなくはない（柳田征司氏説との折衷になるか）。それらがちょうど促音と撥音であるだけに，このｔ入声とも相俟ってｎ撥音の方でのｐ再生のもう一つの要因になりはしなかったか（125頁2行目「六」は「六腑」の脱字か）。

第四節は，北野天満宮所蔵目代日記のうち一五世紀末の初期の日記に見られる「ん」「ツ」の促音・入声表記と撥音表記の混用から，『天正狂言本』のように「現代東北地方のことばに通ずるような方言をベースにしている」可能性を指摘する。中央の京都にあって特異な様相を示す地方語文献が発掘提示されており，第一節とともに促音と撥音の表記混用の分析として他資料でも応用できよう。

第三章はオ段長音開合とウ段長音の表記交替から長音の変遷を追う。第一節では，室町末頃書写『源氏物語古註』のオ段長音とウ段長音の混乱を見出し，特に中世末江戸初期に集中する合音（拗長音）との混乱と開合の問題とを関連させる。オ段拗長音とウ段拗長音の交替表記を，新しい長音が生じたことによる開合とウ段長音の3者の間での体系的ゆらぎと把握するところに独自の視点がある。「開音におされた合音がなお開音との距離をたもとうとして，自らを狭い閉じた形におしさげた，その結果生じたもの」とする。一見，開合混乱よりも当該交替の例が多いようにも見え，過渡的である開合の維持が優先してそのしわ寄せが本来のウ段の方に来ているようにも見える点が，「おしさげた」とだけあるところをやや不安にする（本来的に合音が狭いと見る解釈等との関係）。開合の混乱とウ段拗長音との混乱の例数の多寡や時期の前後関係など追跡してみたいと思われた。

第二節は，上記交替現象によって東国方言を検討する。東国は開合の混乱が西国より先行し相違があったという通説は「明確な根拠があるわけではな」く，上記交替現象の活発さから見てやはり開合の混乱の途上にあるとする。東国方言資料が容易に得られない点を克服する方法として，関連現象から迫って定説を見直している。

三

第四章は，語中無声子音の有声化である「中濁」について，東北方言を投影する『レキシコン』で子音有声化と母音無声化の条件が現代とほぼ同じことを確認し，元亀二（1571）年本『運歩色葉集』では「不審な濁点」表記の巧みな整理によって，筆記者が東北出身で中濁が中世末まで溯ることなどを明らかにする。後者では促音の後で濁音化し

た事例も示され，古い中濁が現在と異なった特徴ももつ点が注目された（198頁2行目一七七四年は一七四四年）。

中濁の時期に関して，ハ行に有声化がないのは，ハ行転呼自体が「有声化」のため対象外となったとするとそのことも時期的目安となるとするが，仮に転呼以前にあっても同様の結果になるか。清濁の対立は，古くは無声/有声ではなく非鼻音/鼻音と考えられ，それに従うと，語中の清子音の方は，有声音であるかあるいは有声無声での対立をもたないことが考えられる。語中の有声化である中濁は，有声母音への同化現象であるが，中濁したbであっても入り渡り鼻音mbがあるうちは，濁子音ではなくpと同様に清子音の範疇でとらえられることになる（濁子音mb/清子音p･b）。pが後にΦ化して，mb/Φ･bになり，ハ行転呼で無声音Φはw化する。ところがその現象は，本書のように「これ自体，語中ハ行子音の『有声化』の現象に他ならない」と見られるから，中濁という有声bへと働く同化の力もハ行転呼音wによって同時に有声化が実現され，しかも構造的に単純化されるので（Φ･b→w）b化は中和解消されてしまう。とすれば，仮にハ行転呼以前にあった場合でも“ハ行転呼音がハ行中濁も消してしまった”という解釈も成り立つか。井上史雄氏の中世説との関わりで直前の現象として検討したところであるが，ハ行転呼とハ行中濁の関係がうかがえて興味深かった。

第五章では，テイル・テアルの東西方言の形成過程について，西国系・東国系両抄物での有情・無情各々の自他動詞数の比較から，従来の説よりも早く東西差が生じていることを確認し，畿内方言が旧形式ヲリからキタリへゆっくりと交替したのに対して，東日本方言では一挙にヲリを新形式キタリに置き換えたためとする。畿内と異なって東はなぜ一挙に交替可能であったかその理由がわかりにくかった。西と異なって東のヲリがそもそも危弱だったのでヲリの抵抗が少なく新形式が浸透しやすかったということか。

第六章第一節では，雨森芳洲『交隣須知』の伝本2系列と増補本の文献批判及び一段化現象等の検討を通して，対馬と北部九州方言を考える。二段活用残存の九州に隣接しながら一段化が進んでいる「現代の厳原など対馬中央部で観察される動詞活用の状態は，18世紀，江戸時代中期頃まであるいは溯る」と，対馬厳原方言という微視的地域差まで読み進める。中央語と九州・対馬・厳原方言というマクロ・ミクロ両面からの比較に目を開かせられる。芳洲は近江の人であるが，一段化は厳原方言とするか編者筆記者他知識階層という位相差かどうか迷うが，増補本成立を解き明かす緻密な文献批判研究に立脚した多角的比較を教えられる[注1]（246頁後1行目にハングル（ローマ字表記）脱字か）。

第二節では，「借りる」の成立と方言指標としての意味を検討して，『天正狂言本』の東国方言資料としての特徴を位置付ける。“1語形の存在だけをとって方言指標とするのではなく，関連する複数の言語事象との体系的な関係性によって説得力ある言語指標となし得る”ことを教えられる。東日本語形「借りる」とそれから「類推」した「生きる」の成立説は広く認められていよう。

第七章は第一節で地方語文献の重要性を強調し，『梅津政景日記』『筆満可勢』他を取り上げて，文献例の博捜と検討が重要かつ着実で有効であることを実践する。第二節では『日葡辞書』の「下」注記語 408 語から，主要方言大辞典と LAJ で九州近辺のみの 50 語強を選別，「下」注記語は「九州特有方言語彙」の有力候補で，「相当古くから独自のものとして成立していた」とする。限られた資料を巧みに生かし地域方言の特徴を可能な限り探す道を教えられる。第三節では，東国系抄物の語彙から特に 10 数項目を検討し「東国特有語彙」を絞り込んでいく方法を提示する。第四節では，『梅津政景日記』を方言文献として新たに見直し，近世初期の常陸か秋田に絞り込める東国武士の言葉を，音韻・語法・語彙に亙って探っている。第八章は，1760 年成立，近江と江戸を隔年で行き来した白翁千梅による「日本語俗言解」を方言資料として検討する。

第七・八章ほか，方言語彙を取り上げたところは多いが，個々の語も方言語彙史研究を展開させる基礎が与えられたと言えよう[注2]。以上，章ごとに概観した。

四

全体の特徴として次のような点を挙げられる。○対象とされた文献は上代から近世まで及び，分野もアクセントを除く全分野に亙り，著者の研究領域が日本語史の全分野を覆っている。○外国資料を含む実に様々な多くの文献が発掘・再検討され価値を見出されている。○体系的視点に立って現象の関連性を重視し，補強し合う複数の現象を照らし合わせて考察している。○それによって，文献や事例の乏しい現象や直接的証拠を得にくい問題でもより確実性の高い解釈を導き出している。○筆記者の言語状況について，記録状況や文字表記能力をも考慮してより細かな考察を加えている。○方言も，中央・地方・筆録者出身地等との間のより細かな地域差を考慮し，中央と地方での時間的ずれにも細かな解釈を加えている。○それらの解釈を相互に補強させながらより整合性の高い解釈を導き出している。○ LAJ 等の方言分布の解釈も慎重で無理がない。

方言国語史の研究方法を説いたものに奥村三雄（1990）『方言国語史研究』二章「方言国語史の方法」がある。上で指摘した“体系重視，多角的多重（重ね合わせ）的比較，微視的比較，類推”等の点で，両書はその基本となる視点において師弟相響き合うも，そのアプローチは自ずから同じではない。本書の方が，「方法」は特に論じていないにも関わらず実践的に応用しやすく感じられる面がある。

本書は，彦坂佳宣（2000）安部（2000）にも挙げられるように，近年の全国的方言国語史の研究書として奥村『方言国語史研究』，柳田征司（1993）『室町時代語を通して見た日本語音韻史』に並ぶものであるが，本書の特色は，これまで狭い世界しか描き得ないかのように見られがちだった「地方語文献」の可能性を大きく拓いた点にある。「近年，『方言国語史』研究の重要性が説かれる。(略)問題は，それをいかにして行うかである。」（佐々木勇 2000）とも言われるが，本書はその研究法の一つを明確に提唱している。

「文献上に残された過去の方言記録をもとに日本語の歴史を新しい角度から眺められないか」（あとがき，下線評者）という著者の目的通り，「新しい日本語史」の姿がまだ多く描き得ることが示された。書名の「方言史」は謙辞である。方言（国語）史研究は古いが（『国語学辞典』1955「方言史」参照），特に（地方語）文献資料による研究方法を広く示した本書から，その新しい段階は始まることになろう。

評者の関心によって繁簡よろしきを得ず，不十分な読みや思わぬ誤解を虞れるが，至らぬところをお赦しいただきたい。著者には本書のテーマと密接に関わる古文書を資料とした論文も多数あり，「この方面でいずれ一書にまとめたい」（あとがき）と言う。その日が遠からず訪れ，方言日本語史研究(↔中央日本語史研究)，さらには新たな日本語史研究を一層導いてくださることをお願いしたい。

本書は，平成10年度新村出賞を受賞している。

注1　247頁「2アマダイリヨフ」を著名な蝸牛とするので触れる。蝸牛なら手で触れられるが殊更「松の葉で針をたつれば無うなる」とある点，蝸牛にない（LAJ他）形態アマがある点で気になった。本書「蜚蠊」にアマメ，「馬陸（やすで）」にアマヒコ(鈔)・クサムシ（大和本草）・ダイロウ（豊前・肥前）があり，アマとダイロウが拾える。韓国・釜山方言では，no rɛ ki で亀虫＝臭虫（崔世恩氏26歳），ヤスデ（崔英洙氏56歳釜山旧址内生ほか）で（『慶尚南道方言研究』は「百足虫」），崔英洙氏他によれば3〜4 cmで柔らかく，触ると臭く，「松の葉」や細い棒でつつくと丸くなって絡まってくるのでその習性を利用して捨てるという。日本にもありそうな撃退法の一種か。

注2　語彙については一二気付いた点のみ記して評者としての責を果たしたい。○第七章第一節「おかたち様 かみなりの事」が解釈上「具合が悪い」とある。御稲荷様など尊称形「御〜様」の神格化型でカダチとは別語形か。○第七章第三節「9コセ」（コセスワフキ）はLAJも87図だけでなく88図(動詞形コズク有)との対照も必要。複合語形コセスワブキも疑われ，その可能性は両形ある北九州か。スワムキというス〜型も大分。出身地方言か。「控えておくべきか」と慎重に記すが。○第七章第四節「フキ（吹雪）」は利用されている『日本方言大辞典』の参照も必要。分布特徴が明らかで日本海型分布（境界線「気候線」（安部1999）北部語形。愛知のフキマワシは旋風からの派生（安部1986）で別語)。その南側になる『常陸方言』にも江戸にもない。常陸より秋田方言の可能性が高いか。

［文献］

安部清哉（2000）「日本語史研究の一視点——方言国語史の視点から——」『国語論究8』，明治書院
佐々木勇（2000）「日本漢字音史の研究法」『日本語学』19-11，9月臨時増刊号
彦坂佳宣（2000）「方言国語史の研究法」『日本語学』19-11，9月臨時増刊号

（1998年2月25日発行　清文堂出版刊　A5判　404ページ　本体価格9000円）

——フェリス女学院大学教授——

（2001年2月5日　受理）